

防除のブレーキ？ アメリカザリガニに対する割り切れない思い

佐藤方博

認定 NPO 法人 生態工房

近年、アメリカザリガニによる生態系被害が報道されるようになり、この問題について認識する人が増えてきた。自然体験イベントや自然観察会でも、アメリカザリガニが引き起こす問題について啓発が行われている。ただし実施内容を見ると、ザリガニ釣りや手づかみなどの直接体験や、雌雄の見分け方、繁殖生態などについての解説が中心のようだ。本種の侵略性についてメッセージを発する一方で、本種に親しむ体験をしたり、生きものとして魅力的な面を強調している。これは例えるなら、自然観察会でオオクチバスに愛着を抱かせるような解説を行い、バス釣りを体験するようなものだ。目的と方法が矛盾しているのではないだろうか。

アメリカザリガニに寛容なスタンスは、なぜ生まれるのだろうか。本種を擁護する（防除すべきでない）理由としてしばしば挙げられるのは、自分が子どもの頃から野外にいた、格好よくて子どもにとって人気者、身近な自然に親しむきっかけとして有効、すでに生態系の重要な一員になっている、駆除すると自然のバランスが崩れてしまう、根絶なんて無理、などである。こうしたフレーズに既視感がある。昔、確かにどこかで聞いた。ああそうだ、オオクチバスを巡る議論だ。本来はアメリカザリガニ防除の側に立ってほしい自然系の活動をしている方々が、かつて親しんだ本種との付き合い方を変えろという踏ん切りをつけにくく、ゆるやかな擁護にまわっているように思われる。

本種に親しみを持っている人が多い現状に鑑み、防除なんて無理だと考える人もいるかもしれない。しかし、こういう種に対する社会の認識が変化してきた例を、わたしたちは知っている。かつてのオオクチバス、その後のミシシippアカミミガメ、近年のコイがそうだ。時代は変わって、今では生物多様性を保全するという方向性はもう、できあがっている。あとは、対策を進めるスケジュール感の共通理解を持ち、活動を前に進めていくことが大切である。